

「自ら考え、判断する力の育成をめざした防災教育」  
～震災・学校支援チーム（EARTH）の活動から～

丹波市立南小学校  
主幹教諭 荒木 真也

1 取組の内容・方法

私は平成 22 年度より震災・学校支援チーム（EARTH）に委嘱され、被災各地で避難所運営、学校再開、心のケアなどの支援活動を行ってきた。一方で、被災地派遣で得た経験や教訓等を、まずは目の前の子どもたちに、そして丹波地区の各校、さらには県内外の教職員等に伝えてきた。被災地で見たこと、経験したことを伝えることこそが、自ら考え、判断する力をつけ、次なる災害に対する備えにつながると考えたからである。

(1) 震災・学校支援チーム（EARTH）の被災地派遣

①東日本大震災（宮城県）への派遣

平成 24 年 7 月、平成 25 年 8 月に南三陸町をはじめとする各被災地の支援に入った。平成 24 年は中学校での学習支援及び心のケアを行った。初めての被災地派遣であったが、他の EARTH 員のアドバイスを受けながら、生徒への接し方や心のケアの方法を学んだ。

平成 25 年は教職員対象の研修会を主に行った。中学校の研修会では、災害後の人事異動で、「同じ職場でも温度差を感じる」「辛さを吐き出せない」などの悩みを抱えた教職員自身の心のケアの必要性を感じた。研修会では、何かアドバイスするというよりも、悩みを聞くことに専念し、共感することで精いっぱいだった。この派遣で、自分自身も一つの悩みに直面することとなるが、それについては後述する。

②熊本地震（熊本市、益城町等）への派遣

平成 28 年 4 月、震災後約 1 週間の時期に益城町、熊本市の各校の支援に入った。被災直後の学校は混乱を極め、教職員が何をしたいのかわからない、教職員自身も被災する中、避難所の運営に関わらざるを得ない状況があった。そんな中、各校で避難所運営の支援や学校再開に向けての助言を行った。熊本県立かがやきの森支援学校では、避難所指定されていないにもかかわらず、多数の避難者が押し寄せ、学校を解放している状況であった。避難所指定されていないがゆえに、行政からの派遣がなく、教職員が避難所運営に従事してしまい、学校再開に向けての取組が後回しになっていた。熊本県教委や管理職等と話し合いを持ち、行政からの派遣を要請し、職員会議において「児童生徒の安否確認、家庭訪問、保護者への連絡など先生方にしかできないことをしてください。」と助言を行った。その後、学校再開に向けての業務に専念できる



写真 1

熊本県立かがやきの森支援学校職員会議

体制づくりが徐々に進んでいった。

平成 28 年 6 月～7 月、学校再開後の益城中央小学校に入り、同小学校に間借りしている木山中学校も含めた支援を行った。保護者会に向けての職員研修、児童生徒の心のケア、教職員のサポートなど、多岐にわたって活動を行った。初めての単独での支援活動だったので、自分にできることは何かを問いただしながらの活動であった。お節介にはならず、適切なケアやサポートとはどのようなものであるかを、改めて学んだ派遣であった。

### ③大阪北部地震（高槻市）への派遣

平成 30 年 6 月、ブロック塀の倒壊により女子児童が亡くなった高槻市立寿栄小学校に心のケアを中心とした支援に入った。該当の 4 年生はもとより、他学年児童も保健室へ頻繁に出入りするなど、落ち着かない様子が見られた。登下校指導や授業に入る中で、気になる児童の様子を担当や各教職員に伝えていった。管理職をはじめ、教職員が一丸となって悲しみや辛さを乗り越えようとしている姿が印象的だった。

### ④西日本豪雨災害（倉敷市）への派遣

平成 30 年 7 月、西日本豪雨の爪痕が残る倉敷市真備町にある、倉敷市立藪小学校の支援に入った。体育館だけでなく校舎内にも避難者があふれ、学校は休校後そのまま夏季休業に入った状態であった。避難所支援をはじめ、2 学期の学校再開に向けてのロードマップ作りにも取り組んだ。

## (2) 丹波市豪雨災害を経験して

平成 26 年 8 月に発生した丹波市豪雨災害時、私は被災した丹波市立竹田小学校に勤務していた。校舎周辺やグラウンドへの土砂の流入、停電、断水が起こった。校区内においても、通学路は冠水し河川周辺の土手は崩れている状態であった。自宅が床上・床下浸水等、被災した児童もいた。幸い、児童とその家族については全員が無事であった。

まずは、9 月 1 日の 2 学期開始を目標にし、職員と市内各校からのボランティアによって、一つ一つの課題をクリアしていった。教職員の協働と多数のボランティアの助けもあって、9 月 1 日には無事始業式を行うことができた。

2 学期開始後まず考えたことは、児童に「今こうして学校に来られていることが当たり前ではない。」「多くの助けがあつての今がある。」ことをいかに児童に伝えるかということである。学校の被災状況を見ていない児童たちに画像を交えながら、ボランティアの活動などを知らせた。その上で、今みんなにできることとして「感謝を姿で表す」「助け合う心を身につける」の 2 つを提案した。予定より 1 週間遅れて開催した運動会では、開催できる喜びを児童が精一杯の姿で表した。特に応援団を中心に考え



図 1：竹田小学校運動会についての新聞記事（丹波新聞）

た地域住民への「復興エール」は多くの被災者を勇気づけるものであった。

災害が起こった時の初動体制を含めた教職員の対応、児童生徒の心のケア、災害後の防災教育など、豪雨災害を乗り越える中で多くの教訓や学びを得た。そしてそれらは、その後の私の防災教育の実践の中にも息づいている。

### (3) 自校での防災教育、他校での防災講話

#### ①自校での防災教育

被災地派遣に行った後は必ず、担任している児童や他学年の児童に派遣先で見た事、聞いた事、経験した事の画像を見せながら話すようにしている。被災地の実情を伝えることが、学校を空けて派遣活動をしている者としての責務でもあると思っている。また、それを伝えることで、少しでも児童の防災意識が高まればよいと考え行っている。



写真2 5年生社会科の授業

また、各教科の中で常に「自ら考える」防災教育を行っている。社会科では、校区地図を見ながら自分の地域にはどういった災害リスクがあるのか考える授業や、低学年の校区探検では、自分たちの命や安全を守ってくれるものを探す活動を取り入れるなど、主体的に防災意識を高められる防災教育を行ってきた。

#### ②他校での防災講話

1. 17 が近づくと、市内外の学校からメモリアル集会での講話等の依頼が来る。私はできる限り断らずに、都合をつけて行かせてもらうように心がけている。それは、阪神・淡路大震災の教訓を語り継ぐことが EARTH 員としての責務であることは言うまでもなく、講話を引き受けることによって、自分自身のスキルアップにつなげるためでもある。知っていることと人に伝えることは全く別で、伝えることでまた新たな発見や課題があり、自分自身を高めていくことになっている。

### (4) 各種研修会での講話

各校での防災講話と同様に、各種研修会での講話についても、できるだけ引き受けるようにしている。その主なものを列記する。

- ・丹波地域ひょうご防災リーダー講座 (H24. 12. 2)  
「震災・学校支援チーム (EARTH) について」
- ・丹波地区防災教育研修会 (H25. 6. 27)  
「震災・学校支援チーム (EARTH) 員の被災地支援～南三陸町派遣報告～」
- ・命を大切に作る心をはぐくむ防災講演会  
「震災・学校支援チーム (EARTH) 被災地レポート」
- ・丹波地区防災教育研修会 (H25. 11. 28)  
「『災害を受けた子どもたちの心の理解とケア (研修資料)』を活用した研修」
- ・防災教育推進指導員養成講座【初級編】(H28. 6. 22)  
「丹波市豪雨災害を経験して～子どもが主体的に考える防災教育」

- ・丹波地区防災教育研修会（H28. 7. 29）  
「熊本地震派遣報告～避難所運営における学校の役割と学校再開について～」
- ・兵庫県特別支援学校知的障害教育校長会研修会（H28. 9. 16）  
「震災への対応及び避難所としての対応～熊本の特別支援学校の事例から～」
- ・岡山県教育委員会危機管理対策本部研修会（H29. 8. 24）  
「学校の早期再開に向けた取組のポイント～熊本地震の支援を通して～」
- ・熊本県学校支援チーム員の養成研修会【上級編】（H30. 8. 10）  
「防災教育推進上の工夫と各教科における防災教育」
- ・防災教育推進指導員養成講座【上級編】（H30. 10. 12）  
「自分の命は自分で守る！～子どもが主体的に考える防災教育」

以上のように、多くの研修会で、講話、講演、ワークショップ等を受け持たせていただいた。当初は被災地派遣の報告が多かったが、経験を重ねるにつれ、「心のケア」「防災教育」「避難所運営」など依頼される内容も多岐にわたってきた。被災地派遣だけでなく、自身の防災教育の実践も積み重ねて、その成果や課題も研修会で広めてきた。

## 2 取組の成果

### (1) 阪神・淡路大震災を語り継ぐ

EARTH設立の趣旨である、阪神・淡路大震災の教訓を語り継ぐことを数多くの機会で行ってきたが、心の片隅にはいつもあることが引っかかっていた。それは、自分自身が阪神・淡路大震災を直接経験していないことである。当時はまだ学生で、兵庫にも住んでいなかった。それまでに見聞きした事のみで、震災について理解したつもりでいたが、宮城県へ派遣された時に、現地の教職員から「阪神・淡路の時はどうでしたか？」と聞かれ、言葉に詰まってしまった。被災地の方にとって、「兵庫の教職員」と言うだけで、防災については深い知見を持っていると思われがちである。その時以降、「経験のない自分が被災地でどんな話をすればいいのか・・・」と悩むようになった。しかし、EARTHの先輩から「阪神・淡路大震災を経験していなくても、自分が受けてきた研修や、これまで行ってきた兵庫の防災教育をもとに自信を持って語ればいい。」「直接体験はなくても、間接的に聞いた事でも自分のものにしていくことが大切。」とアドバイスをいただき、それからは語れるだけのものを身につけようと、進んで研修を受けたり、派遣依頼も率先して受けたりするようになった。

現場でも阪神・淡路大震災を経験した教職員が減ってきて、若い世代にとって遠い昔の出来事となりつつあるが、「知らないから教えられない」のではなく、「自分の知っていることを語り継ぐ」ことが大切であることを、学校現場やその他で伝えている。

### (2) 授業を通して子どもを変え、大人を動かす

児童生徒対象の防災講話の際に、私が必ず行うのが「非常持ち出し袋」の話である。子どもたちに聞いてみると、「家にある」と即答できる子どもは少ない。家で確認したり、家族と話し合ったりするように伝える。そうすることで、家庭の防災意識を高めることができる。そのきっかけとなるのは子どもであると考えている。

子どもは、困った時には親をはじめとする大人を頼りがちであるが、まずは「自分の命は自分で守る」意識をしっかりと身につけさせることによって、親を動かし、大人を動かし、地域を動かすことができると信じている。東日本大震災における釜石の事例はまさにその典型である。

### 3 課題及び今後の取組の方向

「災害は忘れたころにやってくる」と言うが、現代では「災害は想定外でやってくる」と言っても過言ではない。だからこそ、子どもたちには自ら考え、判断する力をつけてやらなければならないと思っている。そのために今後も自己研鑽を積み重ねて、被災地支援、防災教育を行っていきたいと考えている。

丹波市内の EARTH 員の中では最も長い経験年数を持つ立場になった。今後は、自分の実践のみに留まらず、EARTH 員をはじめとする市内の教職員に実践等を語り継いでいきたいと考えている。